繪本隅田川
兩岸一覽

上

203
3
97

203-97
1200800112017

帝國圖書館藏

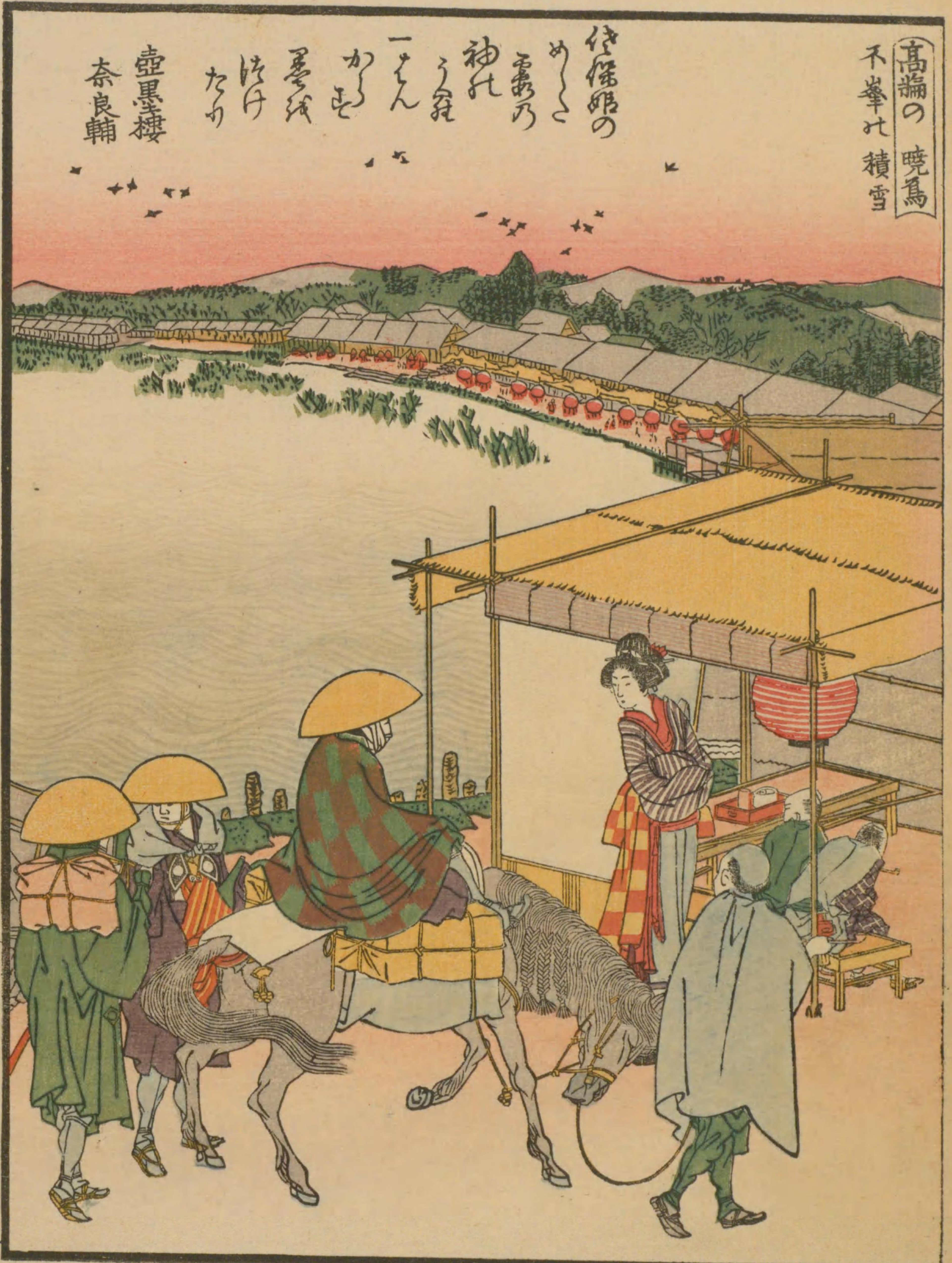
一此風光画冊とて此の東京浅草なる
り[illegible]以[illegible]書肆の以
物[illegible]北斎翁の筆畫にて工ふ
[illegible]
此隅田河両岸の勝地を摸写せられ當
中微細にいたるまで京地の風物の和
し實に東都の風光画写にて尚し
納涼の[illegible]出る[illegible]ハ忽ち当風[illegible]

大正
6. 3. 23
購求

く三伏のあつさをわすれ雪のあした
渋茶迄りしに燗して樽を屋して酒好る
絶むるの浅深まて鳴伴奇むけ筆を
もてあそひは菊ゐこれなるはなほさら
他や友と志あつくて感賞して持て仙鶴堂
乃あるし求めて是小戯れに此書ん
綴いろはぬ此の低やくて酒友と會
しく
談し得意ならしむる戸のあるまて何迄

酔狂仲間も名ぬけ同士互の狂画にし
狂利のおふ戯と白取りて熱とて千々と秋
味酒乃先かけくらて隅田川ある處一巻と
酌して酔さめて名もやらぬ花さくらち年
よりあつまりて書林のもとめによりて志らく東南
志るしぬるひとつ深くたゝ葉

壷十楼
成安

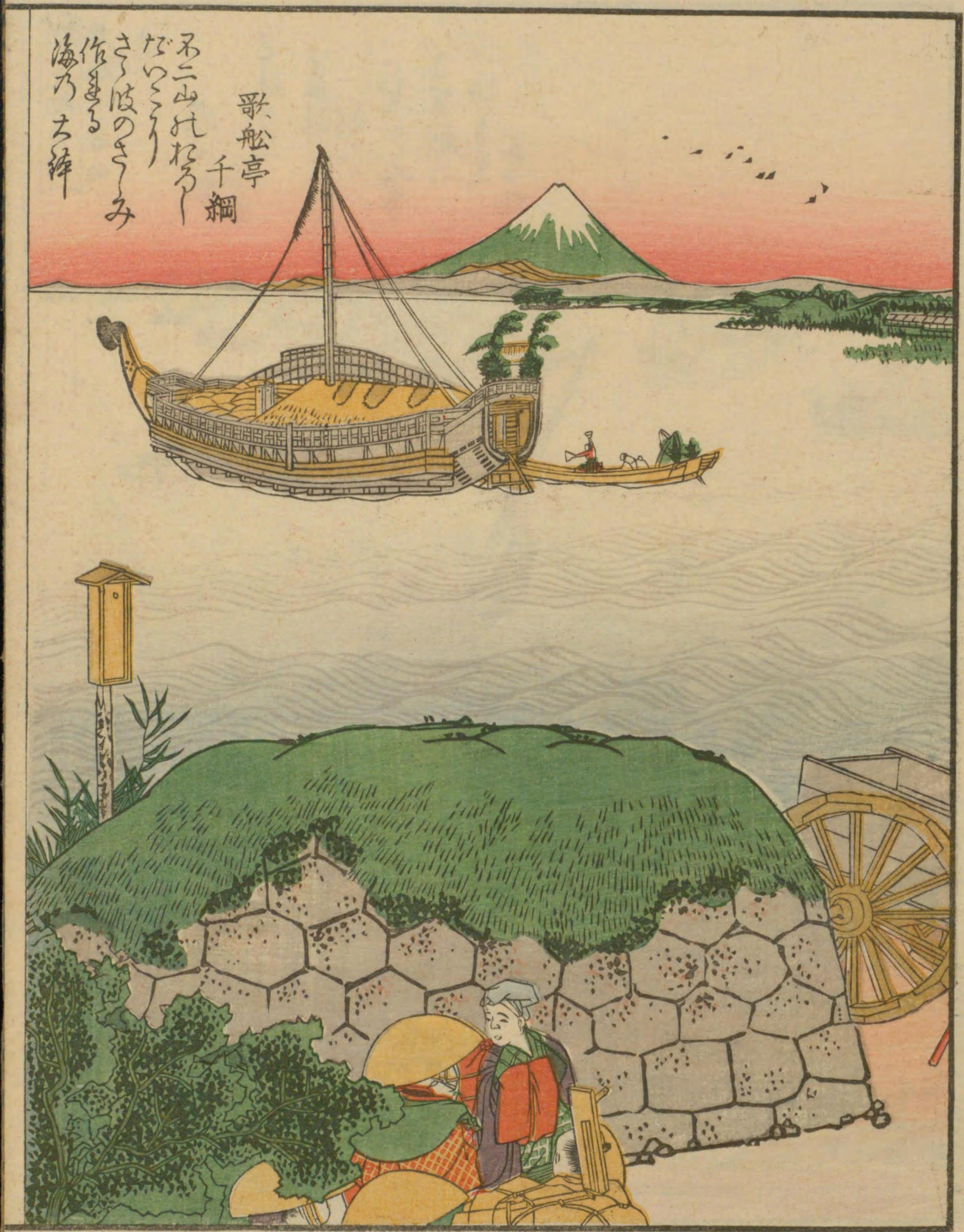


高輪の暁鳥

不峯は積雪

佐保姫の
めしき
霞乃
袖は
うち拂
一まん
かうを
墨統
詠げ
たり

壺墨樓
奈良輔



歌船亭
千綱

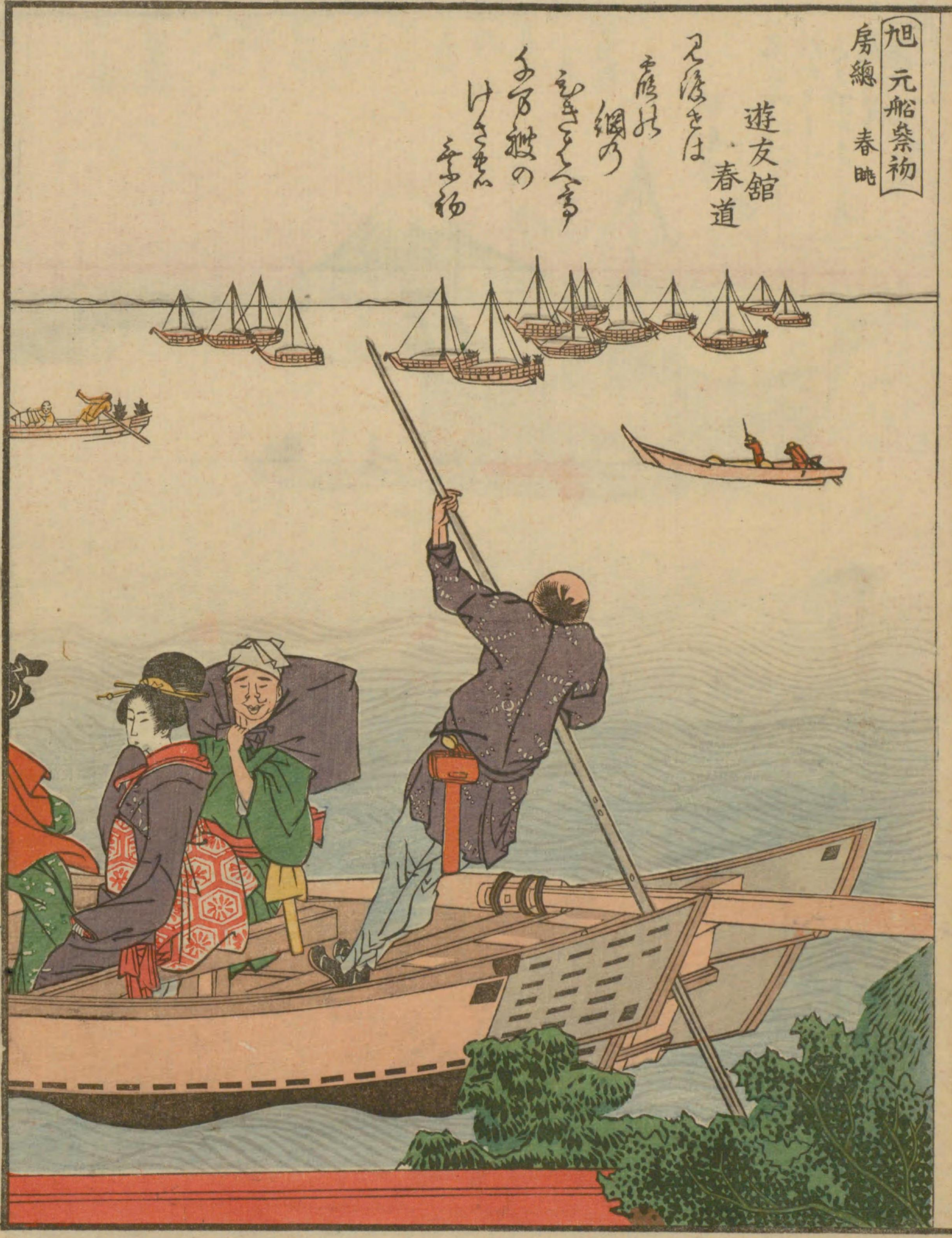
不二山はねなし
なゐところり
さゝ波のさゝみ
作まる
海乃大綿

旭　元船祭初

房總　春眺

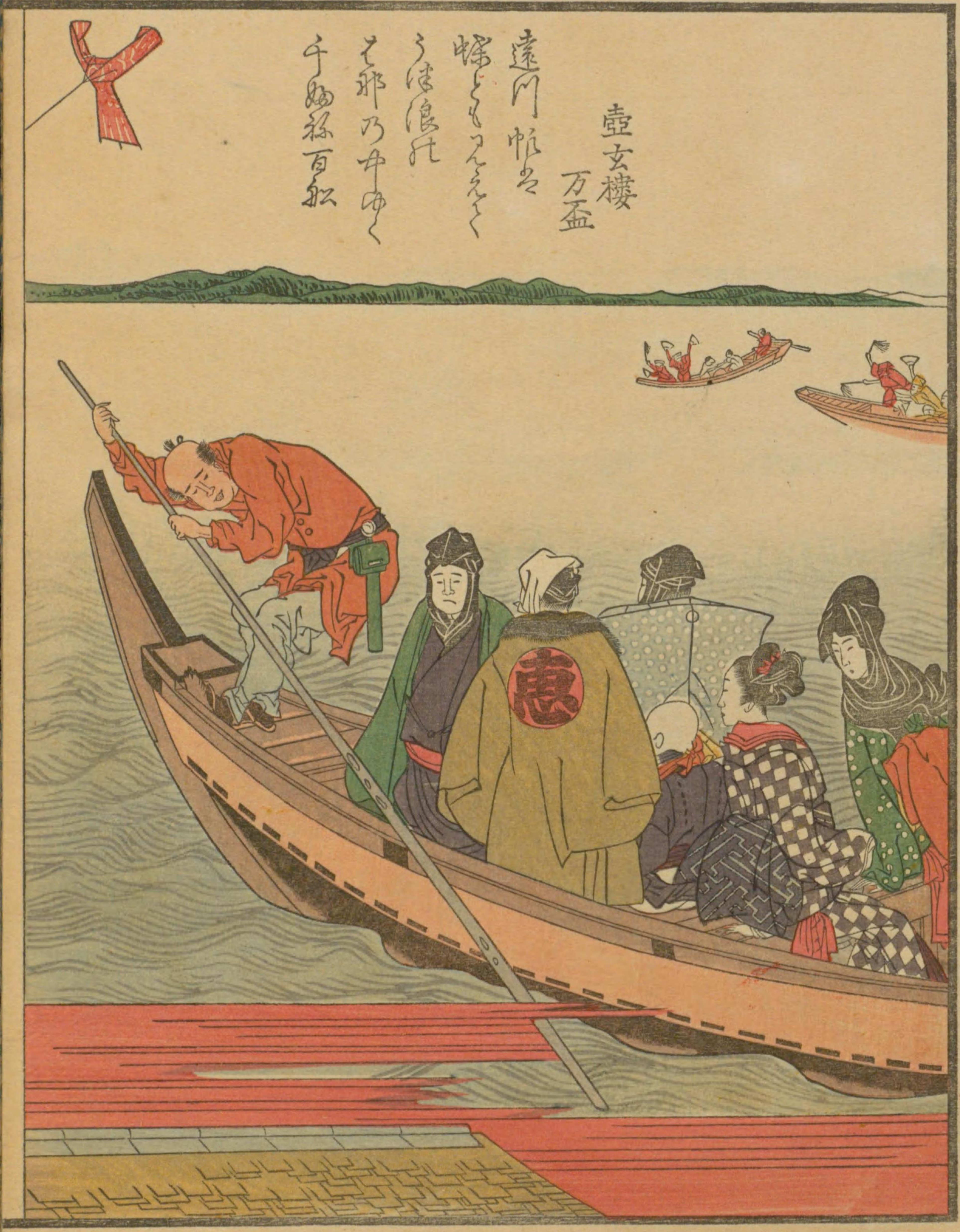
遊友舘
春道

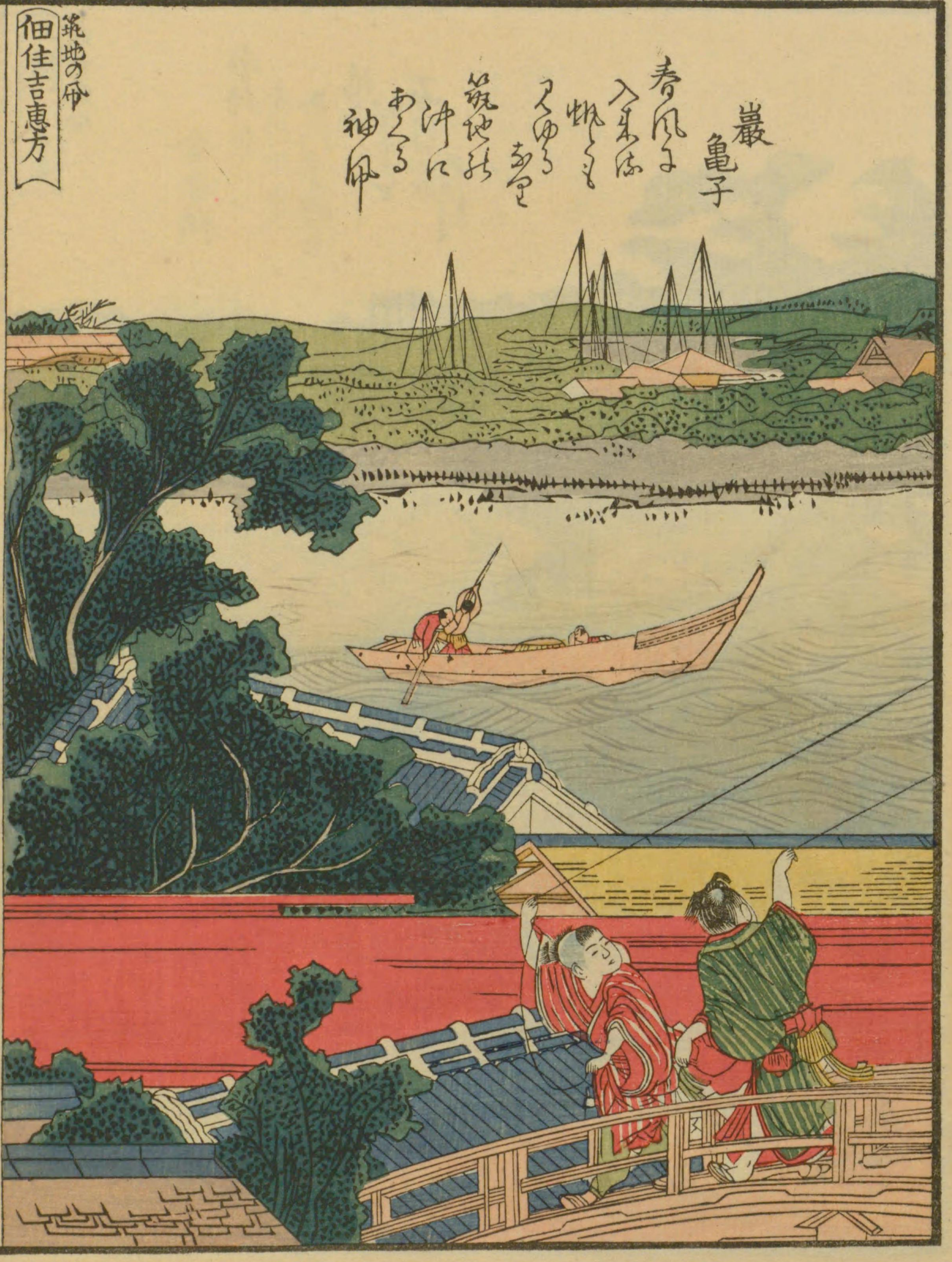
見渡せは
霞は
網の
ひきよせん事
千万艘の
けさきれ
千舟



壺玄樓
万盃

遠州帆も
蝶ともつれゆく
うつ浪に
はなの中ゆく
千艘孫百舩



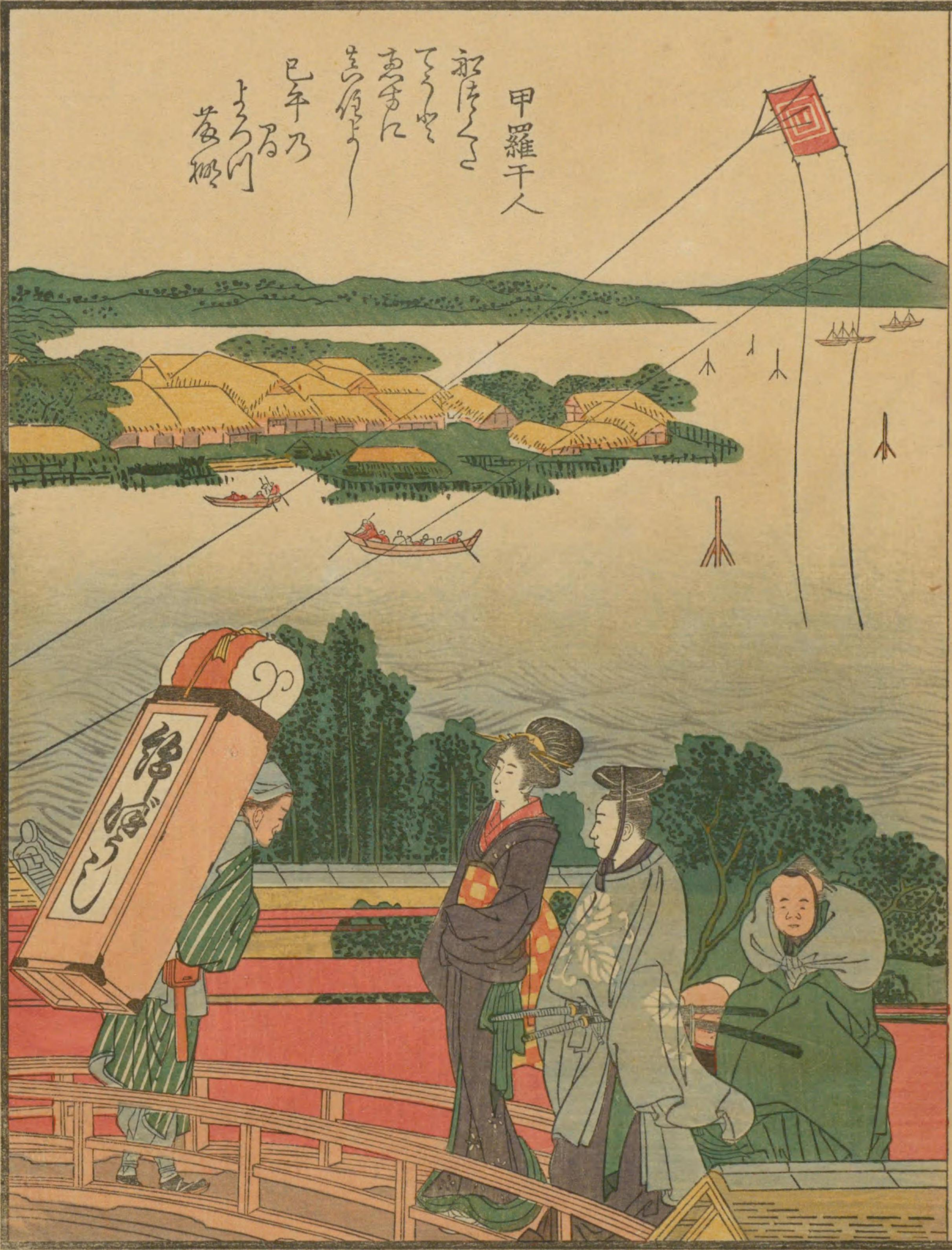


築地の方

佃住吉恵方

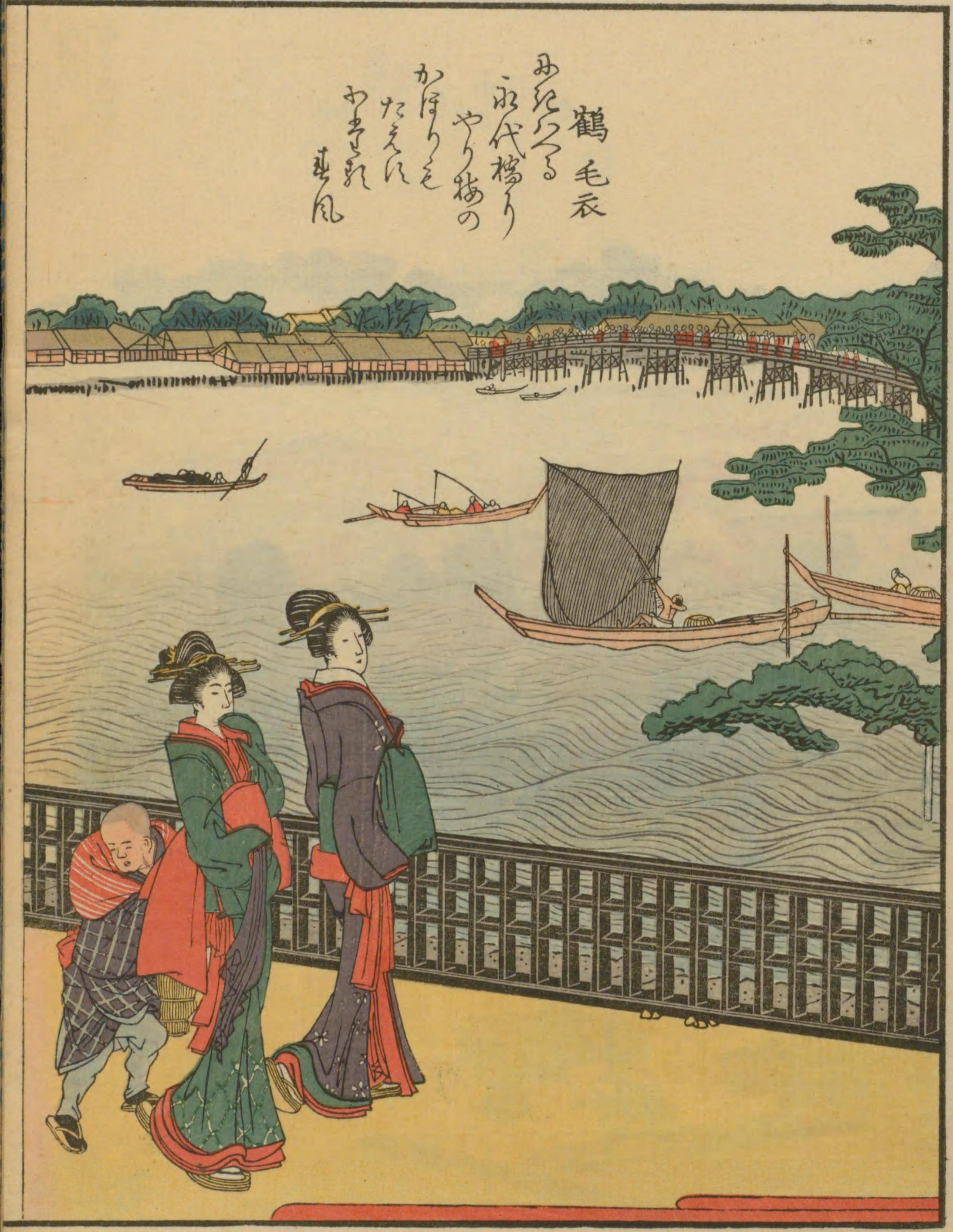
巌亀子

春風に
入来る帆も
みゆる也
築地の
沖に
あくる
神風

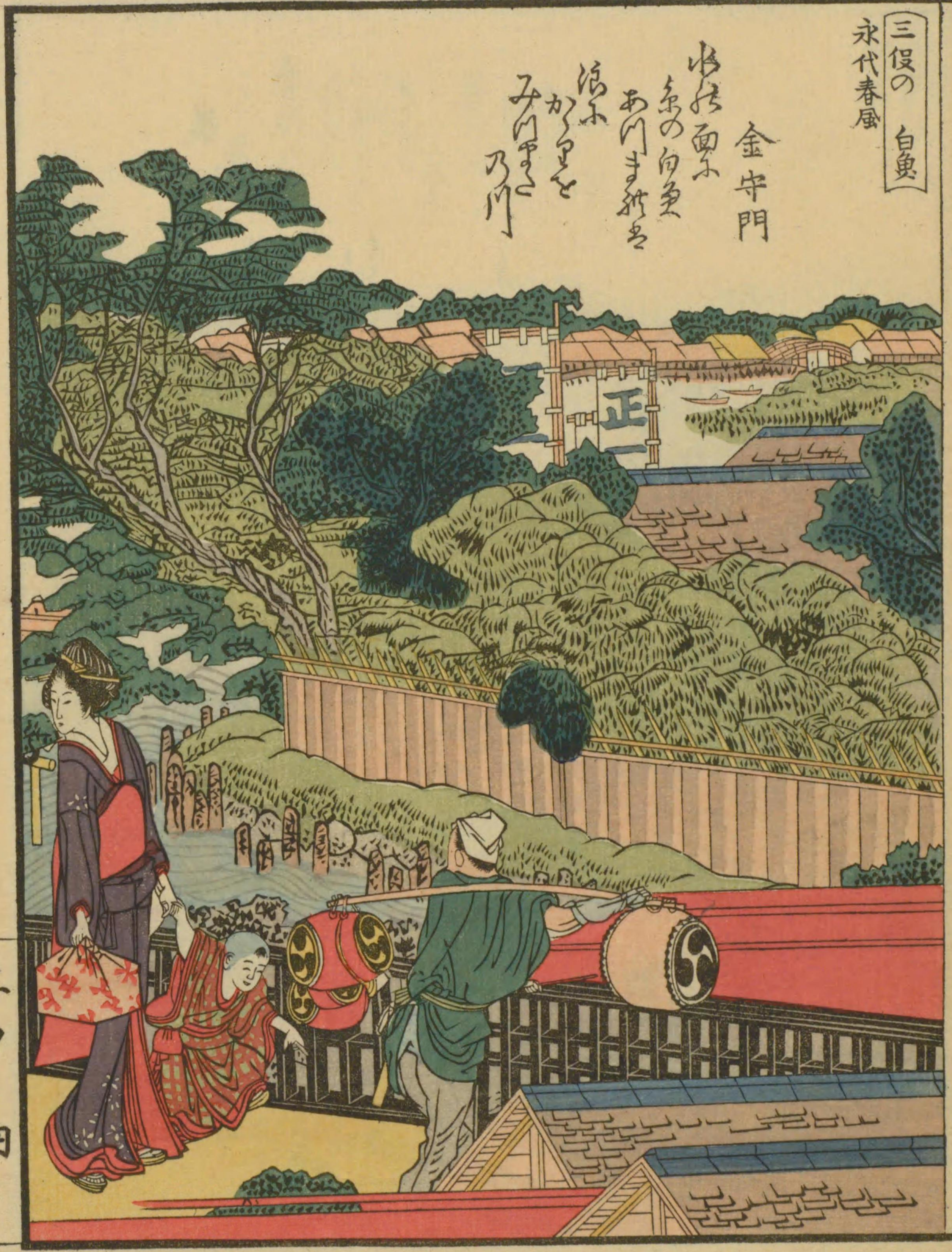


甲羅干人

和らくき
てらす世
恵方に
吉原より
巳年乃
召る
よろ川
苗櫛



鶴毛衣
みちくる
永代橋より
やり梅の
かほりを
たえに
やまされ
春風



三俣の　白魚
永代春屋

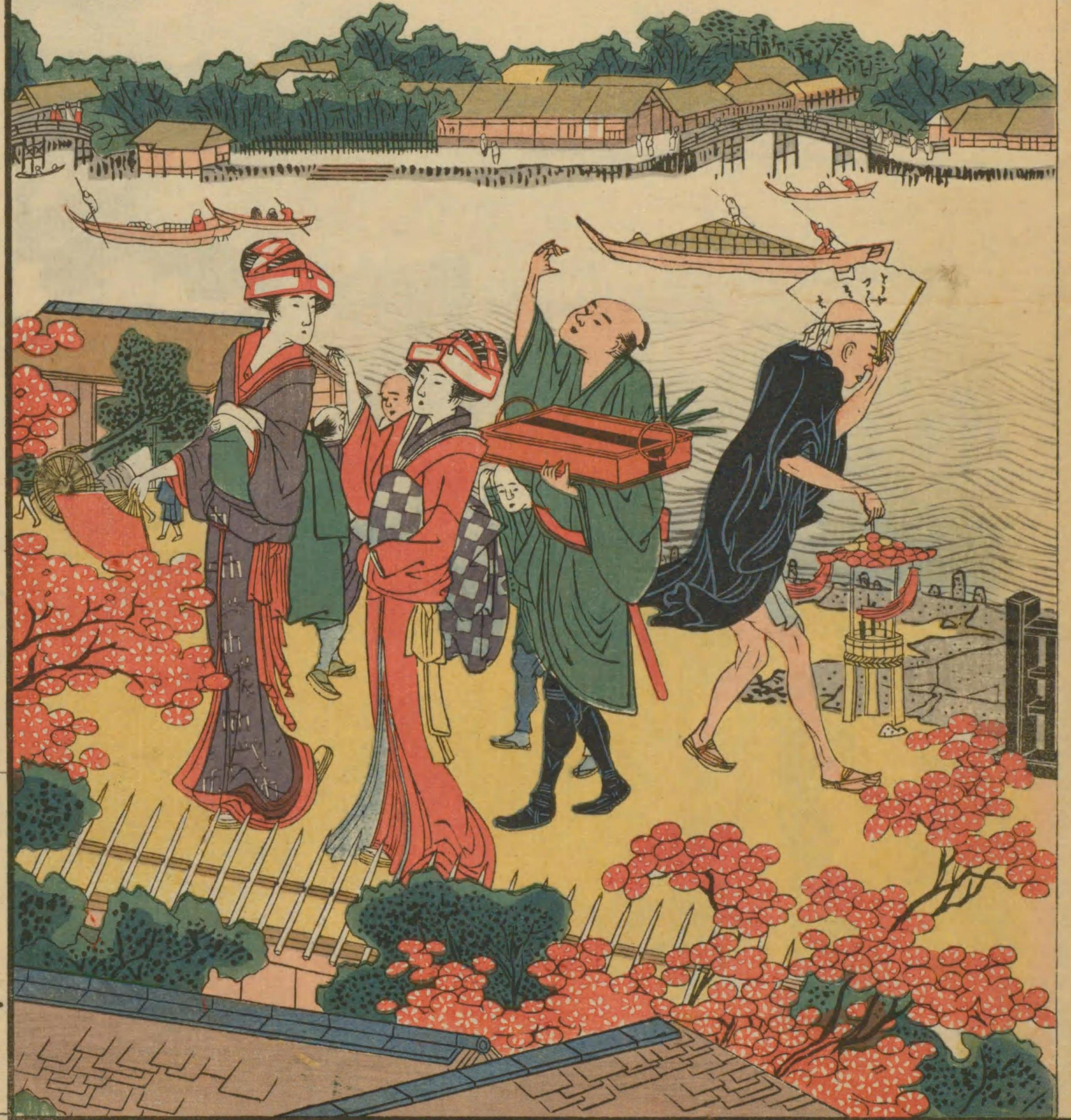
金守門
水の面に
糸の白魚
あつまりて
浪に
かゝるを
みつまたの川

上ノ四

市中の花
新寺の新樹

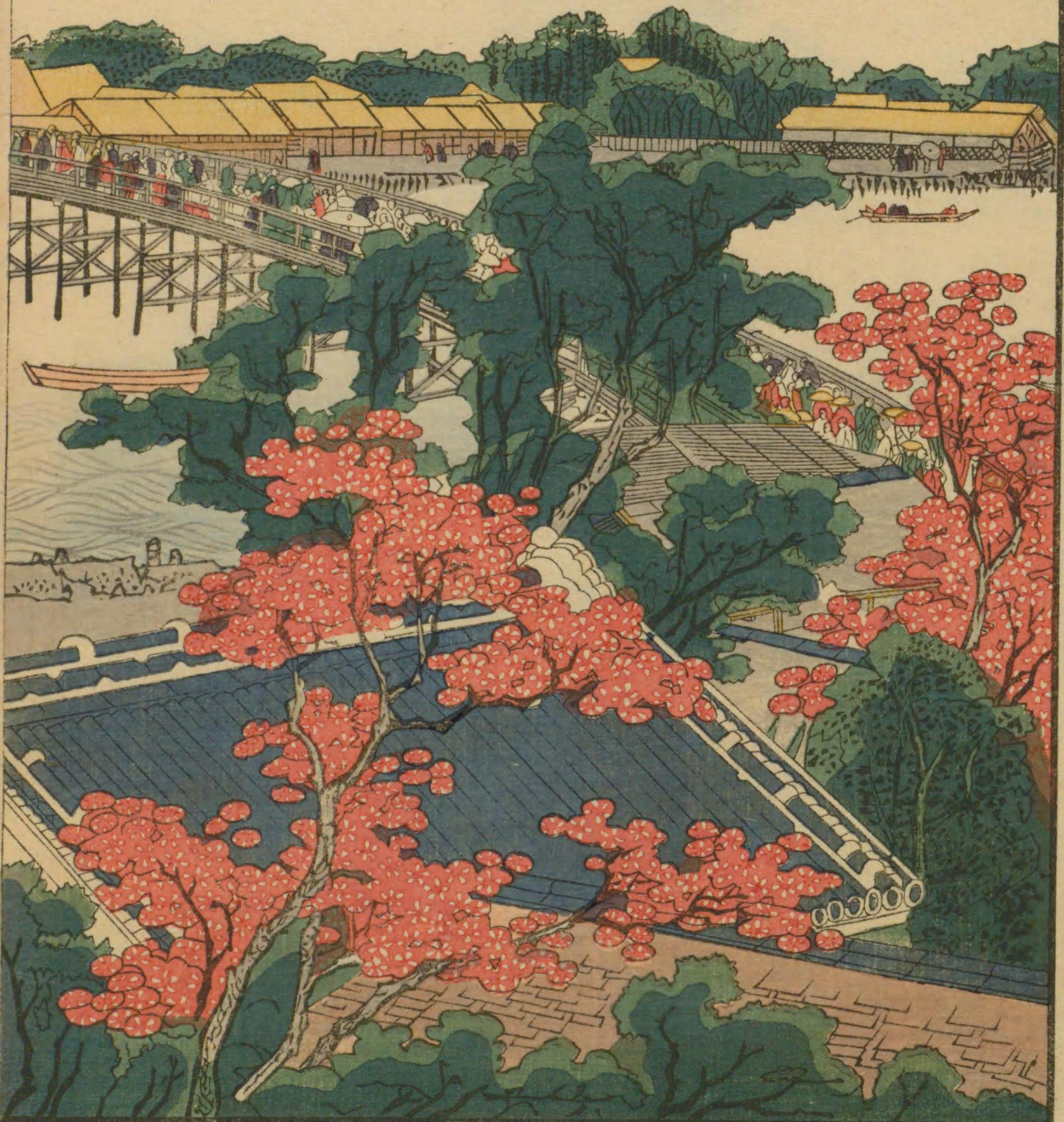
桐政女

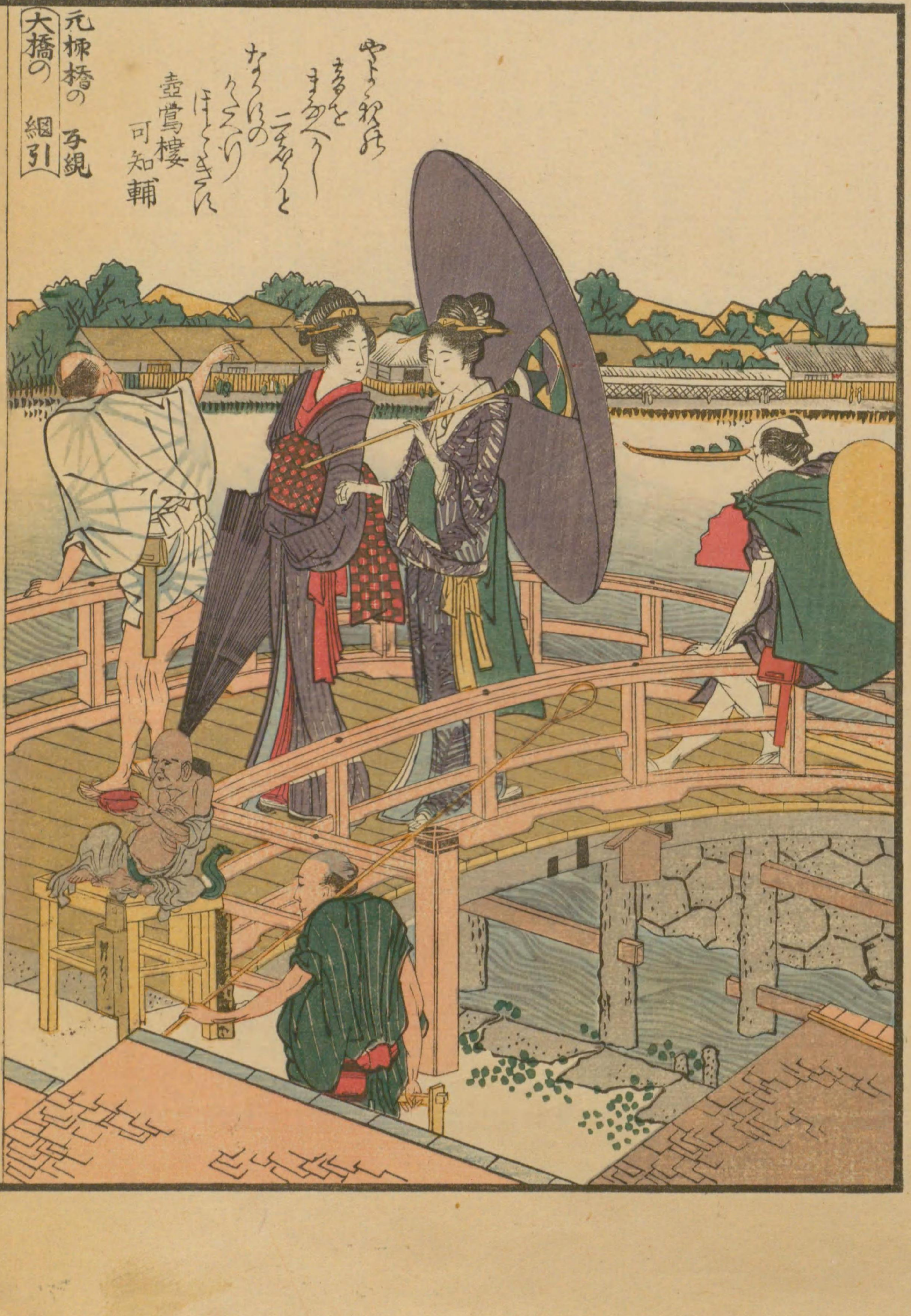
家ことの
桜の枝を
手折
しと
あと
はけられに
蝶の
舞ひ
来る



京
唐橋
村雄

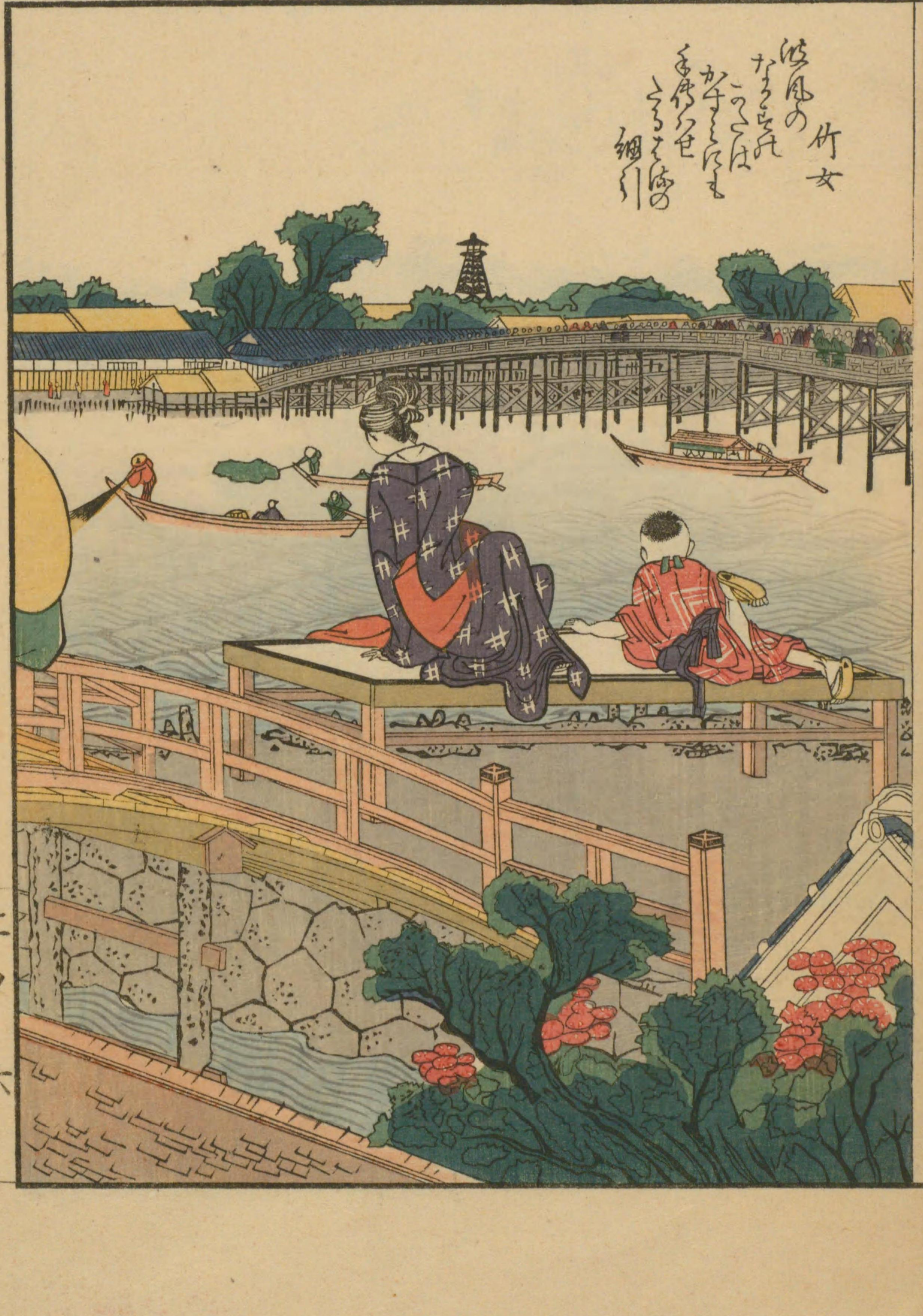
日に影の
そらぬ
あらしを
ふくろうれ
目も
見ゆる
みと
柳のふ
まくらき



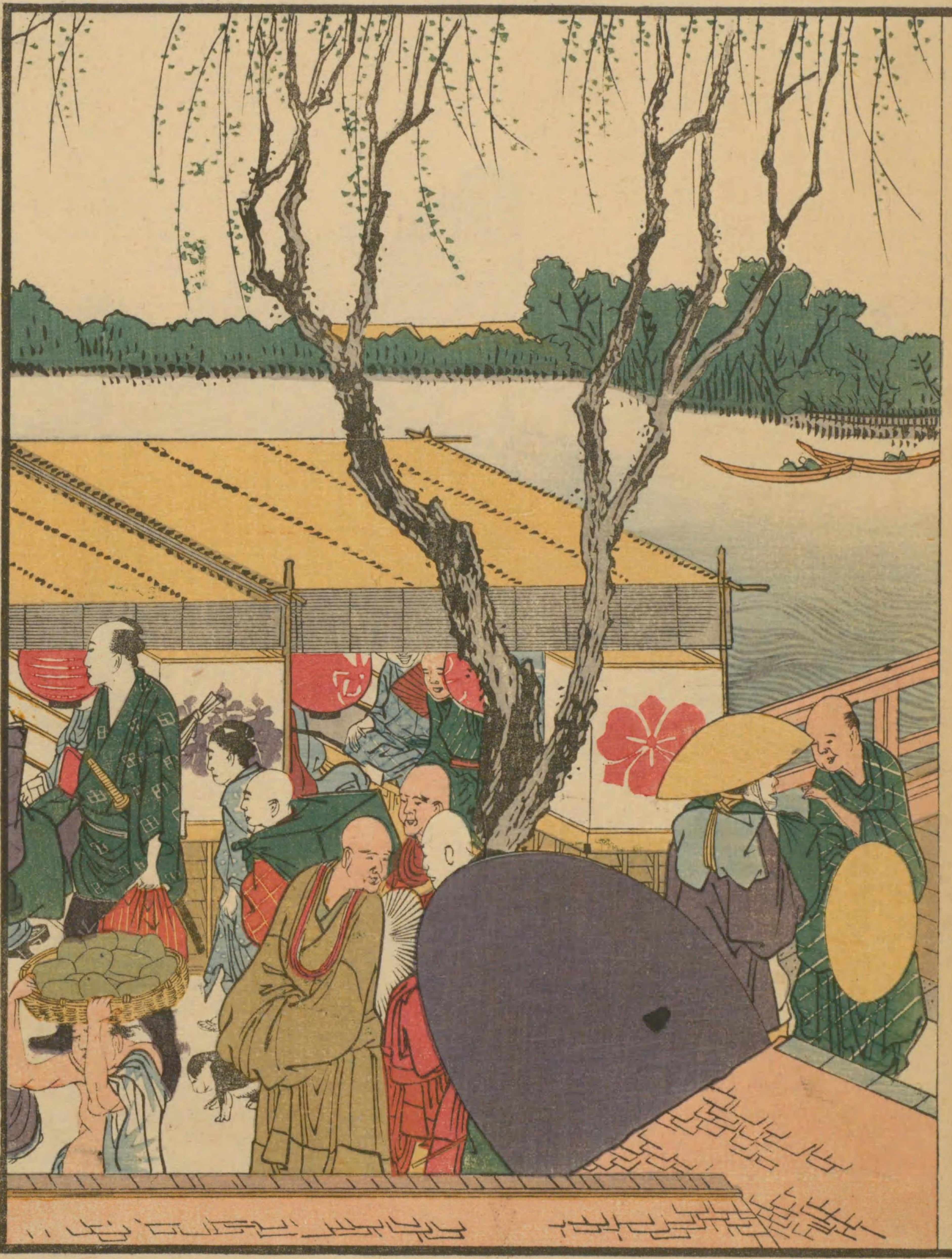


元柳橋の子規
大橋の網引

やなきはし
声を
まねかへし
二声めと
なくはの
くとり
ほとゝきすれ
壺鶯樓
可知輔



竹女
波風の
なきにあれ
このては
かすみにも
手くりをせ
よるせの
網引



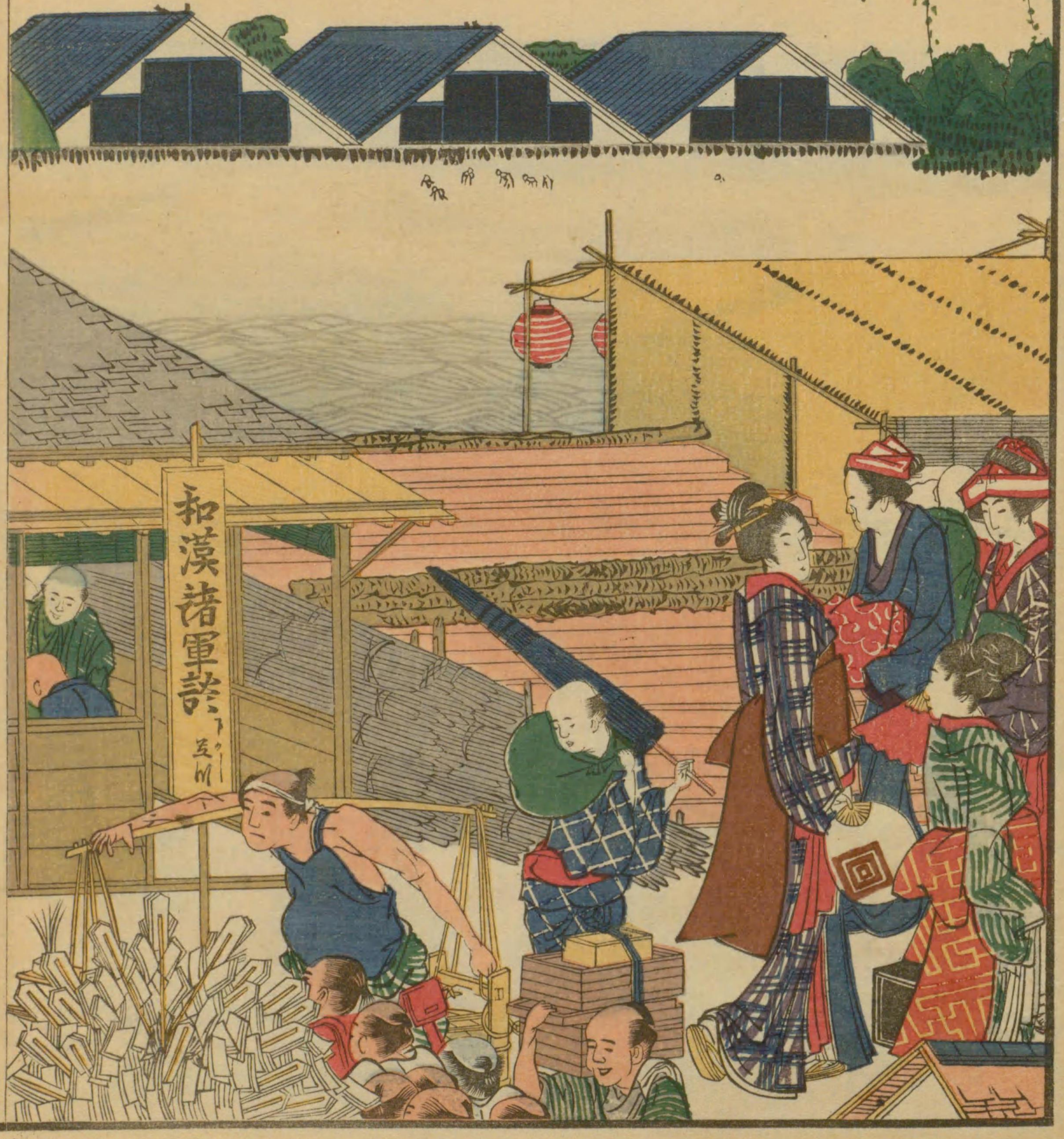
廣小路の
御船藏の 蜂　屋筆集

京 俵藤子

あつちて 涼しき河へ 笛吹れ 秋を告る床 日くらし乃出来

貢計舎 升盛

両國の 橋の たもとの 夕風を 持てうら 袖へ ぬける 涼しさ



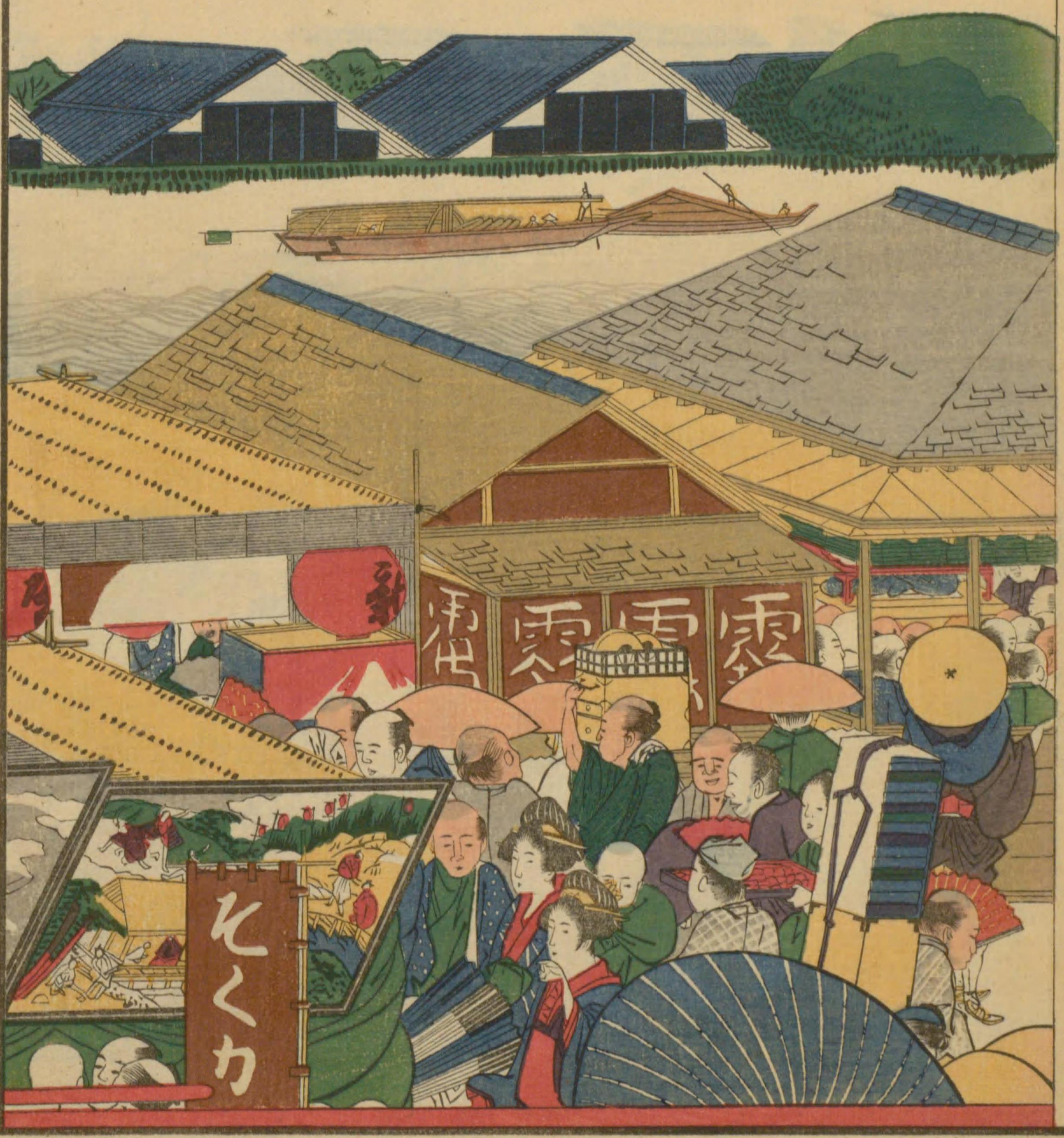
其二

三巴園
蓮室

押しあふて
足さへ地には
つかぬ
ほと
身も
かるわさとされ
芝居
みるらん

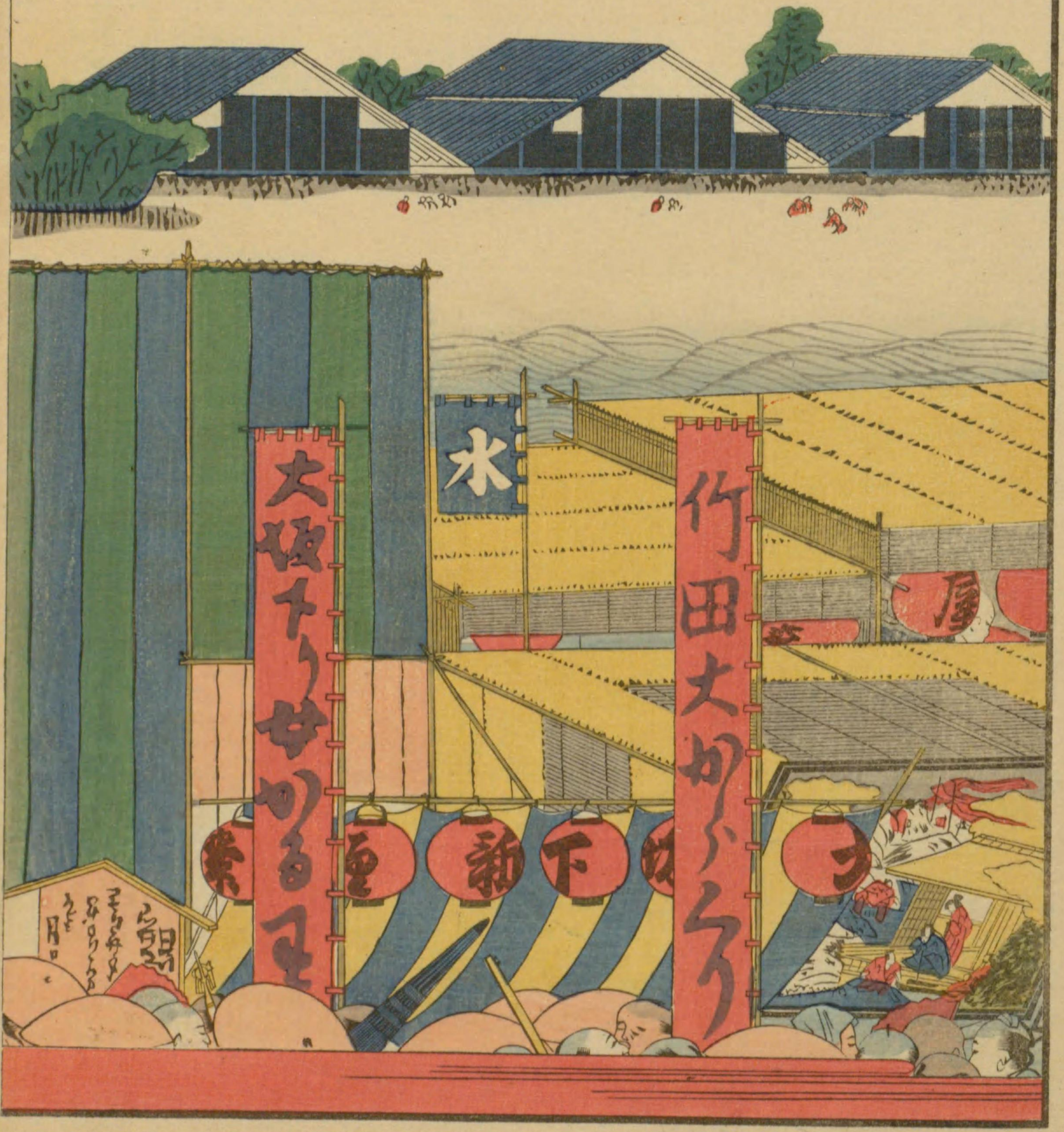
貢光軒
宇壽喜

高かりの
茶らんせり
人乃よふ
まとゐ
我せん
翟集銭
なりて
廣小路



六月庵
峯雪

川の面を
玉や
鍵屋を
漕
ませて
最る札
銭銭
なれは
花乃人船


水
大坂下り女かるわざ
竹田大からくり
新
下

203
3
97